

## 書評：『ポピュリズムという挑戦』

編者：水島治郎  
出版社：岩波書店  
出版年：2020年  
総ページ数：316ページ

評者：箭内 任  
(人文部門 教授)

本書の編者である水島はすでに『反転する福祉国家』（岩波書店、2012年）、『保守の比較政治学』（岩波書店、2016年）などを著してきたが、このなかで水島はポピュリズムが持つ包摂と排除の図式は解放の論理と抑圧の論理の図式に一致していると指摘し、ポピュリズムはその経過において解放の論理から抑圧の論理へと変貌して来たとして述べていた。またそれに続き『ポピュリズムとは何か』（中公新書、2016年）ではポピュリズムを固定的な支持基盤を超え幅広く国民に直接訴える政治スタイル（日本の中曽根政権、イギリスのサッチャー政権、フランスのサルコジ政権、イタリアのベルルスコーニ政権など）であり、また「人民」の立場から既成政治やエリートを批判する政治運動（フランスの国民戦線やオーストリアの自由党）であると定義した。

このように自らのポピュリズム理解を世に問うた水島が、その問題意識を共有する11人の研究者と編んだのが本書である。

本書は三部構成からなり、第Ⅰ部ではポピュリズム時代の現代政治をめぐっての概説的な検討が、第Ⅱ部ではポピュリズムが拡大するヨーロッパ各国の展開及び分析が、最終第Ⅲ部ではポピュリズム時代のデモクラシーの多様なかたちについて、それぞれの論考がなされている。それぞれの各章で今日のポピュリスト勢力が詳細に分析され、今後の政治のあり方を展望している。

編者である水島は、本書の冒頭で、昨今のグローバル化したポピュリズムが掲げる「二つの挑戦」を挙げ、それが戦後世界で成立し発展してきた既成秩序を揺るがしていると言う。それは反エリート主義的な発想に基づき代表民主主義に強い不信を示しリベラルな価値を批判するという、戦後発展してきたリベラル・デモクラシーに対する挑戦であり、またブレグジット（イギリスのEU離脱）のように反EUやEU批判という形をとるインターナショナリズム（国際協調主義）に対する挑戦である。第一の挑戦はその国々の国内状況に向けられ、第二のものは他国との国際関係に向けられる。しかし、双方とも「官僚的な規制」に対する批判や「主権を取り戻す」ことを訴える主張と容易に結びつく。というのも、それらは戦後世界の国際協調主義に対する批判や自国民優先の「自国第一主義」を掲げ、国際協調の枠組みから距離を置く動きに呼応するものだからだ。

第1章の古賀光生論文「『主流化』するポピュリズム？」では、ポピュリズムの概念をめぐるこれまでの議論が整理され、ポピュリスト勢力における「主流化」現象が考察される中、ヨーロッパのポピュリスト勢力が反EUという点から求心力を得ようとしている現状が明らかにされている。つづく第2章では編者の水島によって「中間団体の衰退とメディアの変容」が「中抜き」時代のポピュリズムをもたらしたという現状分析がなされている。第3章の今井貴

子論文「遅れてきたポピュリズムの衝撃」では、イギリス国内の既成政党は従来ポピュリズムを抑制してきたにもかかわらず、ここに至って衰退してきたことが分析されている。

第Ⅱ部ではドイツ（第4章野田昌吾論文）、フランス（第5章土倉莞爾論文）、イタリア（第6章伊藤武論文）、オーストリア（第7章古賀光生論文）のヨーロッパ各国の揺らぐ状況が分析され明らかにされ、最終第Ⅲ部ではオランダを例とし、国政中心のポピュリスト政党に抗する地方政党の存在から見た地方政治のあり方（第8章作内由子論文）、直接民主主義（国民投票）とポピュリズム（第9章田口晃論文）、フランス大統領選挙及び下院選挙で勝利した中道・マクロン派の躍進がもたらした意味（第10章中山洋平論文）、トランプ政権成立へと至る背景にあった勢力とポピュリストとの関係（第11章西山隆行論文）、そして日本におけるポピュリズムの展開の検討（第12章中北浩爾論文）などデモクラシーへの挑戦としてポピュリズムを理解する興味深い考察がそれぞれ行われている。このような構成は、水島も執筆者として名を連ねている『民主政とポピュリズム』（佐々木毅編著、筑摩書房、2018年）に等しく、これらを相補的に読み比べてみるのもいいだろう。いずれにせよ、ポピュリズムという概念を一様のもつと固定化させることなく各国の内政や外交状況を俯瞰するには格好の手引書となっている。

この中で水島は、有権者の多くが各種団体に所属することによってその団体に関係する政党や政治家を支持してきたことや、自らが黨員としてその組織活動に参加してきた従来のあり方とは異なって、その各種団体を通しての「政治的社会化」が「中抜き」されたところにポピュリズムが台頭してきた原因を見ている（第2章）。水島によれば、「中抜き」とは既成団体への組織率の低下や弱体化、政治志向の多様化による政党離れ、団体離れを意味する。このように政治参加の中間団体は先細りし「中抜き」の状態になってはいるものの、社会各層の利害を一部のエリートが調整している「多極共存型デモクラシー」の枠組みだけは残っているため、そこに既成政党や既得権益を批判するポピュリズムの土壌ができる。

たしかに日本においての「中抜き」の原因は中間団体の弱体化だけではなく「無組織層」が有権者の最大勢力になったことにある。「無組織層」は団体が支援する政党とは無縁であり、また既成団体や政党に対する違和感も強い。彼らの投票行動は団体からの指示ではなく、メディアやネットを介した自己判断である。そのため、それに乗る参入者の選挙戦略も団体に支援されたものではなく、むしろ各種団体を徹底して批判することに重きが置かれる。国内では大小様々な政党の中から競争原理に基づく新自由主義的な「保守系ポピュリズム」が台頭し、そこからその典型である首長が東西の大都市に出現したが、彼らに共通するのは、声高な政治的スローガンであり、またワンフレーズ・ポリティクスと言われるように論点の単純化であった。水島の論考を読むと、これも既成政党による弱体化から、またその既成政党を支援してきた中間団体の弱体化からもたらされた「中抜き」の結果として理解することができる。

この「中抜き」という視点から読み返してみれば、第Ⅱ部の各国の実情についても、この「中」という言葉が持っている様々な意味－政治的中道や民意を反映させる制度上の「媒介」、あるいは市民的中间層－を確認することができると思う。

ところで、水島はこの「中抜き」が「専門家抜き」として進展した時に政治のあり方は大きく変わると言う。その一つは新聞、雑誌、テレビ、ラジオなどの既存の主流派メディアから「Twitter 政治」と揶揄されるブログ、動画サイト、SNSなどのソーシャルメディアへと移行することであり、また従来では考えられなかったソーシャルメディアやネットメディアから主流派メディアへと情報が伝播する「スピルオーバー」が発生することで、主流派メディアがポ

ポピュリズム拡大の手先となるということである。この共犯関係こそがポピュリズムを拡大し支えている。

しかしここで指摘した以上のものが存在すると水島は気づいている。それはポピュリズムとラディカル・デモクラシーとの関係である。ラディカル・デモクラシーがデモクラシーの深化を求める多様な運動や思想と結びつくとすれば、ポピュリズムと同じ根を持つことになる。

ここからは、水島もかつて取り上げていたシャンタル・ムフの論を参考に考えてみることにしよう。ムフは著書『左派ポピュリズムのために』（赤石書店、2019年）にあるように、反本質主義的なアプローチからデモクラシーを徹底させその根源を見極めることを目指し、それを社会主義的なプロジェクトとして定式化しようと努めている。

彼女が求めたこの新たな政治的フロンティアの構築は左派によるポピュリズムであり、このポピュリズムには従来の社会的なカテゴリーには回収されない要求や申し立てという多様で異質な者たちの声が領域横断的に反映されている。政治的な場へ参与する行為者は、その前提に複数性と等価性があることによって、改革と解放を果たす政治の場を創り出し、またそれを軸として排外主義的政策を推し進める右派ポピュリズムに対抗するラディカル・デモクラシーを主張できる。複数性と等価性とは連鎖するデモクラシーを形づくり、そこに左派ポピュリズムが追求する価値があると彼女は断じる。

こうしてみると水島が指摘するように、たしかにラディカル・デモクラシーの議論はポピュリズムに近づいてくると言えるだろう。「草の根」という立場からデモクラシーを再構築し、既成の制度による支配的な構造を打破し、直接的なデモクラシーによって人々の意思を実現することや、それを「下」からの運動とすることにより民衆の不在を解消すること。そしてこれにより既存のデモクラシーに生じている様々な問題を解決しようとするなど、ポピュリズムにもラディカル・デモクラシーにも欠かすことのできない要素となっているのである。

水島は『ポピュリズムとは何か』でポピュリズムを「ディナー・パーティの泥酔客」と呼び、現代のデモクラシーの真価はこの厄介な賓客をどのように遇するのにかかっていると結論づけていた。「大衆迎合主義」などというありきたりの言葉では回収しえないこの賓客の処遇をめぐる問いは極めてデモクラティックな問いであり、この問いは賓客のアイデンティティと主人のアイデンティティをめぐるポリティクスに容易く変容する。ヤン＝ヴェルナー・ミュラーの言葉を借りれば「ポピュリズムとは、つねにアイデンティティ・ポリティクスの一形態なのである」（『ポピュリズムとは何か』岩波書店、2017年）。

先に挙げたムフはアイデンティティ・ポリティクスをいかなる形ではあれ集合的同一化へ対峙するものだと語っていた。今まさに目の前に現れているポピュリズムは、彼女がデリダを援用し語っていた「構造的外部」—共同体が存在する時、まさにその条件のもとで、その共同体の外部の人々もつねに存在する—としてあらためて問われなければならないものとしたら、そこには「我々」と「彼ら」との間に恒常的な境界線があるのだろうか。それともそこからは距離を置き、それぞれの生活のコンテクストを前提としながら政治的議論を可能とするような公共圏のインフラストラクチャーを政治的に作り上げていくということを「我々」と「彼ら」に課し、ともに学ぶべき連帯の中に位置付けるべきなのだろうか。

評者は、本書を通して、ポピュリズムの挑戦が意味しているものとはまさにデモクラシーの「正統性」への挑戦であるということ、あらためて思い知らされた。